

金銀は世渡りの宝ではあるが
使い方を誤るとかえって害を生む

大谷吉継

一龍斎貞花

講談師

関ヶ原の合戦で敗戦を予知しながら石田三成に味方し、壮絶な死を遂げた武将がいた。大谷行部吉継。

豊臣秀吉が長浜で初めて城持ちになったとき、子飼いの家来があるわけでなし、地元近江で有能な若者を次々と召し換えた。寺の小坊主だった石田三成しかり。吉継は一歳下の三成と親友で、三成らと共に召し換えられ、なかなかの美少年であったともいわれている。秀吉側近として出世していく三成の口添えもあり、取り立てられていった。

天正5年、19歳のとき、秀吉の中国攻めに旗本の一人として出陣し、上月城攻撃、三木城包囲戦、備中高松城水攻めと、秀吉の進撃に大貢献。

織田信長が明智光秀の反逆によって横死したあとも、光秀との山崎の合戦、柴田勝家との賤ヶ岳の戦いには、有名な七

本槍に劣らぬはたらき。

天下を手中に収めた秀吉は、戦場での華々しい武功はないものの、その頭脳を評価し、三成を近江水口4万石の城主に。このとき三成は、自分に欠けている合戦の采配をまかせようと、筒井順慶の旧臣で剛勇の聞こえの高い島左近を1万5千石で召し換える。

親友の城持ちを祝った吉継は、

「島左近を高禄で迎えられたそうじゃな。あの御仁は必ず骨身を惜しまず働こうが、誰もがそうかという、なかなかそうはいかん。金銀は世渡りの宝ではあるが、使い方を誤るとかえって害を生む。小禄のうちは主人大事と働くが、高禄になるともっとほしがる。はなはだしくは主人に取って代わろうとする者も出てくる、下克上の時代でもある。人の心というものは禄高ではない。家来を思いやる心があるかないかだ。人のつながりは信義あってこそだ」

吉継の言葉どおり、左近は感謝して骨身を惜しまず働いたし、のちに三成は蒲生氏郷の旧臣蒲生郷舎を1万5千石で召し換えている。自分の足りないところを補うために家来を高い禄高で召し換える姿勢は素晴らしいことだが、才におぼれ実利主義の官僚的な三成のやり方を案じてこそその忠言であった。

成績に見合った報酬は当然だが、金さえ出していれば従業員は働くのは当たり

前というのではなく、成果主義にも心、信義を忘れないで頂きたい。金だけで働く者は、少しでも高い方へ行くんです。

親友の忠告にも三成の性格は治らず、加藤清正ら武断派との軋轢が生じてくる。天正13年、秀吉が関白に成るや三成は治部大輔と五奉行の一人に、吉継も行部小輔に任ぜられます。

友情と信義

ある時茶会に三成も吉継も出席、吉継は今でいうハンセン病を患い皮膚はただれていた。濃茶の会とあって大きな茶碗が次から次へ、吉継のところへまわったとき鼻汁が落ちた。当時は感染すると思われていたため、吉継以降の大名たちは飲むまねだけして次へ、その茶碗が三成のところへ、三成は平然として一滴残らず飲み干した。以後、吉継は「三成のためなら命もいらぬ」と、三成の情に感謝した。

秀吉が死去するや、たちまち三成と清正、福島正則らが対立。徳川家康は、上杉景勝討伐に出陣すれば三成は必ず立つと読んだ計算どおり、三成挙兵。吉継は挙兵を思い止ませようと必死で説いたが三成は聞かず、毛利輝元を総大将に西軍を結成し、天下分け目の関ヶ原の合戦。吉継は敗戦を予知していたが、長年の友情に報いるため西軍に加わる。

このとき吉継、病が進んで目が見えな

くなっていた。顔に覆面をかぶり輿に乗って軍配を握り、果敢に戦う。

緒戦は有利であったものの、小早川秀秋の裏切りにより形勢は一気に逆転。

小早川、脇坂安治、小川祐忠、朽木元綱らの隊がドッと吉継軍に攻めかかる。

目が見えないにもかかわらず大軍を向こうに廻して戦うというのですから、いかに軍略に秀れていたかがわかります。

敵の動きを察知して、自軍を縦横に動かす、正に心眼。普通ならこんな目の見えない大将ではと、兵は逃げ出す。それが最後まで采配通りに働く、やはり部下を思う吉継の心、信義あったればこそでありましょう。

しかし、必死の防戦も多勢に無勢。ついに吉継は乱戦のなか腹真一文字にかっさばいて自刃。家来の湯浅五助が介錯し、三浦喜太夫が主君の首を羽織に包んで泥中に隠したのであります。

墓は関ヶ原に流れる藤吉川を臨む藤川台に。敦賀市結城町の真願寺門前に、敦賀城跡の碑が往時を偲んでいる。

病魔を押して友情と信義に生き、42歳をもって戦場の露と消えた大谷吉継。

その勇姿は今も語り継がれている。

吉継の介錯をつとめた五助は、藤党高虎の甥、高刑に討ち取られるが、高刑は「五助との約束でござる」と、吉継の首のありかを家康に報告しなかった。

ここにも心ある武士がいたのである。